貴重な体験であった。

チェックの蝶ネクタイに濃茶のツイードのスーツを着たユルスキー氏の講演は、ロシア文学と演劇とをテーマに1時間半に及ぶミニ・ステージ仕立て。山之内重美氏による詳しい紹介のあと、19世紀のロシア文学作品から詩や散文を朗読してくれた。『オネーギン』からの朗読には、音声化されたロシア語の美しさにあらためて感銘し、ガルシンの『蛙の旅行家』には大笑いした。熱演するユルスキー氏が、次第に蛙に見えたり、野鴨に見えたりするのが不思議である。蛙が野鴨たちと空を飛ぶ方法を思いつく場面など、いったいいつの間に仕込んであったのか、テレビの裏から1本の細い枝を取り出して、口にくわえて見せれば、いやほんと、蛙はきっとこんな枝にぶら下がって、バタバタと風に揺れながら野鴨たちと一緒に飛んで旅をしたに違いない、と、情景がありありと浮かぶのだ。ちなみに、あと一言で蛙の大冒険を語り終える段になって、ゆらり、と日本名物の地震に見舞われたが、そんなハプニングさえ、楽しんでしまうようだった。現代作品では、親交のあったブロツキーの詩を、独特の節をつけて朗誦し、思いがけない魅力を発見できた。音声という要素はロシアの文学作品に驚くような可能性をもたらすのである。

ガエフスキー氏は、私生活でもユルスキー氏と親しいそうだが(住むのも近所らしい)、世代的なこともあってか、現代演劇を論じながら、モスクワの現在や将来を対する危惧をユルスキー氏と共有していた。とりわけチェーホフやドストエフスキーなどをはじめとする古典作品を侮辱したり軽蔑したりするようなモスクワの流行を指摘し、モスクワを代表する演出家に、つぎつぎと辛口の批評を加えていった。短い滞在期間のためにスケジュールが押してしまい、バレエやオペラの話を聞く十分な時間がなかったことは残念だが、辛らつさをユーモアでくるむその語り口に、演劇を厳しく育てるロシアの批評家の強さを垣間見ることが出来た。

また、ユルスキー氏やガエフスキー氏、ロシアの芸術をこよなく愛するお二人それぞれと、講演会というどちらかというとあらたまった場だけではなく、こぢんまりとした空間で和やかに同じ卓を囲むという贅沢な時間を和やかに過ごせたことも忘れがたい思い出になるだろう。

(楯岡 求美・記)

ロイ・メドヴェージェフ氏来訪

1998年10月3日、ロイ・アレクサンドロヴィチ・メドヴェージェフ氏の講演が本郷キャンパスにて行われた。氏はかつてのソ連においてサハロフ博士やソル

ジェニーツィンと並ぶ代表的な反体制派知識人（ディシデント）であり、現在も社会主義者としての立場を貫きながらロシア勤労者社会党を率いて政治活動を行っている。またメドヴェージェフ氏は在野の歴史家としても広く知られており、今回の初来日は氏の著書『1917年のロシア革命—ボリシェヴィキの勝利と敗北』が現代思潮社から翻訳出版されたのに合わせたものだった。来日に際して氏の講演会は幾つかの大学で催されたが、本郷でのこの講演会は通訳なしということもあり、関係者中心の出席を見込んであまり大きくない教室が宛がわれていた。が、それにも関わらず、開けてみると法文1号館の会場は学内外から集まった聴衆で満席状態だった。実際、通訳なしの氏の講演会に外国人の聴衆がこれだけ集まったことは、氏自身、初めての経験だと非常に驚いていらっしゃった。

会場に現れたメドヴェージェフ氏は73歳という年齢にも関わらず、青のジーンズ風のシャツに細かい水玉模様の黒のネクタイといった出立ちで、やはり現役で活躍している方らしく颯爽としていらっしゃる。老眼鏡こそかけているものの、紅潮した顔からは並々ならぬエネルギーが感じられた。

講演は『1917～1922年のロシア革命の歴史的意義』と題されたもので、著書『1917年のロシア革命』を踏まえた概論的な内容であり、革命から80年が過ぎた今こそ、ソ連では賞賛の対象、西側では攻撃の対象となってきたロシア革命をもっと客観的に見直そうというものだ。氏の革命に対する評価と批判は著書にも詳しく述べられているが、とりわけ、「いずれにせよ、我々にとってロシア革命は歴史の一部のみならず人生の一部なのだ」と強調なさっていたのが印象深い。

講演後に東大正門前のレストランで懇親会が催されたが、さすがに超大物かつ政治・歴史分野の人物だったということもあったのか、残念ながらスラヴの院生はほとんど出席せず、教授クラスの高次の懇親会であった。ちなみに、今回の氏の来日にはロシア側の出版社 «Права человека»（ヒューマン・ライツ社）のイーゴリ・ザイツェフ氏も同行していた。ザイツェフ氏が昨年に我々の研究室を来訪され、今日のロシアの出版事情について講義をしてくださったことはまだ記憶に新しい（ザイツェフ氏の訪問についてはSLAVISTIKA XIII 350頁に記述がある）。この出版社から出版されたメドヴェージェフ氏の最新著書 «Капитализм в России?» が今回の会場でも紹介された。

余談だが、後日、縁あって岩波書店本社で行われたメドヴェージェフ氏と和田春樹教授の対談に同席させていただいた（この対談は雑誌『世界』1999年1月号に掲載されている）。この時、氏はポットにホットミルクを作って持参しており、2時間饒舌をふるい続ける氏に、30分ごと筆者がお茶汲みならぬミルク汲みをするよう仰せつかった。百戦錬磨のディシデントとホットミルク。最後に私が氏から受けた印象である。

（守屋 愛・記）